様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　6 月　24 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５３０６１６

研究課題名（和文）　うつ経験者の回復期支援法―自分史分析（４テーマ分析法）を用いた支援の効果

研究課題名（英文）　The convalescence support method of a person who experienced depression：Effect of the support using Life History Analysis (Four Theme Analyses)

研究代表者
杉原　俊二（SUGIHARA SYUNJI）
高知県立大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：50259644

研究成果の概要（和文）：うつ経験者の回復期支援として４テーマ分析法（以下、４Ｔ法）を10名に実施し、８名（男６名、女２名）は中断なく終えることができた。手順をマニュアル化した。初回面接（面接の手順と調査協力の承諾）。第２回面接では、対象者の年表を調査者と一緒に作成した。うつ経験者では、「発症前」「発症時」「治療期」「リハビリ期」とテーマを一定にした。第３回～第６回面接（４Ｔ法の実施１テーマ１回）。第７回面接（振り返り）。語られた内容を文章化して、２人で読み合わせ内容の検討。第８回面接（終了面接）。これまでの面接内容を振り返り。

研究成果の概要（英文）：　The study carried out Four Theme Analyses to ten target people as support for the convalescence of the depression experienced person. Eight people (six men, woman two) were able to finish it without interruption soon. I became a manual in the following procedures. The first interview(consent of confirmation and the investigation cooperation of the interview procedure). The second interview (theme setting). The third the sixth - interview(enforcement of Four Theme Analyses) . The seventh interview (look back). The eighth interview (end interview).

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2010 年度 | 700,000 | 210,000 | 910,000 |
| 2011 年度 | 200,000 | 60,000 | 260,000 |
| 2012 年度 | 200,000 | 60,000 | 260,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 1,100,000 | 330,000 | 1,430,000 |

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学
キーワード：社会福祉関係、うつ病、リハビリテーション、自分史分析、４テーマ分析法

１．研究開始当初の背景

(1)自分史分析について

研究代表者の杉原（以下、「杉原」とする）は自分史を用いたセルフヘルプ（セルフケア）の方法として、自分史分析を用いている（自分史分析は杉原の造語)。元々の発想は、援助職の「バーンアウト症候群」の予防法として、スーパービジョンを実施することを考えた（フル、ピア、セルフの３段階)。そして、自分で出来るセルフヘルプの方法として、自分史分析を考案した（杉原 2005a)。

自分史分析とは、自分の歴史を自分で表現し、自分で分析し、自分で理解し、自分で正当に評価をして自分を受容していくセルフヘルプ（セルフケア）の視点を持った援助方法である。そして、自分史分析はナラティヴアプローチの一技法として理解することができるということを考え出した（White, M. & Epston, D. 1990、White, M.1995、小森・野口・野村 1999 などを参照。杉原 2005b、c)。また、回想法も、援助方法として近い関係にある（Butler, R. N.1963、黒川ほか 1999)。

杉原は自分史分析の方法ついて検討をした。「自己分析－援助者分析」「自己筆記－インタビュー」という２軸、４パターンの組み合わせがある。また、杉原は主に２つの方向で「自分史分析」を実践している。一つは「自らの人生を自ら書き出し、自分で分析する」方法である。すでに「セルフ・カウンセリング」（渡辺 1990、2003）として一定の方法があるが、その方法を最近では「テーマ分析」（テーマを決めて自分史を書く、例『父親との関係』『仕事と自分』)、「エピソード分析」（テーマ分析よりも細かいエピソードを中心に書く）と区別をつけて検討をしている。もう一つは、「自分史を他者にインタビューしてもらい、自分と他者の２人（以上）で分析する」方法である。これを「生活史分析」として、すでに 20 名以上のインタビューを行っている。そのうち、18 名は 2009 年３月までにインタビューを完了している。（杉原 2005b、c、2006a、b、2007a、b、2009a)。

最近では、数人の研究者が自分史や自分史分析を様々な援助方法として応用している。例えば中村（2006）は生活史分析（やテーマ分析の一部）のように人生を自ら記述し、そこからソーシャルワーカーとしての「価値」の問題について論じた。中村はその後、ソーシャルワーカーの自己覚知のために、自分史を研修会などで応用している。また、「ターミナルケア」研究グループは自分史（特に生活史分析）を取り上げて、実践をしている。さらに東京のＮＰＯ法人がニートやひきこもりの援助としてエピソード分析とテーマ分析を用いている。このように、援助方法として自分史（あるいは自分史分析）を積極的に取り上げる例が増えてきた。

(2)生活史分析の問題点

「自らの人生を他者にインタビューしてもらい、自分と他者の２人（以上）で分析する」方法といっても、一定の方法が存在するわけではない。杉原も試行錯誤を繰り返している最中である。特に、自分史分析の中心である「自分史をどのように記述するか」については、一つの方法が決められない状態である。先行している社会学でも「ライフストーリー・インタビュー」として一定の方法論があるわけではない（Emerson, R., Fretz, R. & Shaw, L. 1995、桜井 2002、2005、徳田 2004)。また、「生活史分析」を実施するために面接を 20 回近くすることが多く、時間がかかることが問題であった。

そこで対象者の年表を作成してその中から４つのテーマを選び、それをテーマ分析する「４Ｔ法」を考案し、実践している（杉原 2008a、b、2010)。

(3)「中年期の危機」への支援方法

健常者の生活史分析をおこなっている中で、「それまで経験したことのない体調の不良」や「連続する強いストレスにさらされる」「自分の人生の分岐点に立つ」といった『中年期の危機』と呼ぶべき事柄が、35 歳から 40 歳代にかけて起きることがわかった。そして、それを乗り越えることがこの年代のテーマとなっていることがわかってきた。これらは、自分史を杉原に語っている中で、どちらともなくそれに気づき、対応することが出来るようになっていたのであった。「うつ経験者」に対する生活史分析を実施したときにも、同じような『中年期の危機』があるように思えた（杉原 2008b)。

(4)文献

Butler, R. N. (1963) The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. Psychiatry, 26, 65-76.

Emerson, R., Fretz, R. & Shaw, L. (1995) Writing Ethnographic Fieldnotes. (＝1998, 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳『方法としてのフィールドノート－現地取材から物語（ストーリー）生成まで』新曜社.)

黒川由紀子・松田修・丸山香・斎藤正彦（1999）『回想法グループマニュアル』ワールドプランニング.

小森康永・野口裕二・野村直樹（1999）「ナラティブ・セラピーの世界へ」小森康永・野口裕二・野村直樹（編）『ナラティブ・セラピーの世界』日本評論社, 3-13.

中村卓治（2006）「実践から捉えるソーシャルワークの価値の検証－精神保健福祉士

の視点から」吉備国際大学大学院社会福祉研究科（通信制）2005年度修士論文.
桜井厚（2002）『インタビューの社会学－ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
桜井厚（2005）『ライフストーリー・インタビュー－質的研究入門』せりか書房.
佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク－書を持って街へ出よう』新曜社.
杉原俊二（2005a）「対人援助学と自分史分析」『人間科学研究』2，11-20.
杉原俊二（2005b）「自分史分析に関する一考察（Ⅰ）―ナラティブアプローチへの手掛り」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』10，　81-90.
杉原俊二（2005c）「自分史分析に関する一考察（Ⅱ）－生き方を変えるきっかけ」『吉備国際大学保健福祉研究所研究紀要』6，49-58.
杉原俊二（2006a）「自分史分析のフィールドノート（Ⅰ）－ある国立大学教授の学歴・職歴より」『人間科学研究』3，1-10.
杉原俊二（2006b）「自分史分析に関する一考察（Ⅲ）―自分と向き合うことと語り－」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』11，115-128.
杉原俊二（2007a）「自分史分析のフィールドノート（Ⅱ）－ある放送作家の大学・大学院生時代」『人間科学研究』4，1-12.
杉原俊二（2007b）「自分史分析に関する一考察（Ⅳ）－生活史分析を用いた援助－」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』12，23-36.
杉原俊二（2008a）「自分史分析のフィールドノート（Ⅲ）－あるおばさんの田舎暮らし」（『人間科学研究』5，1-12.
杉原俊二（2008b）「自分史分析に関する一考察（Ⅴ）－テーマ分析から生活史分析へ」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』13，11-21.
杉原俊二（2009a）「自分史分析に関する一考察（Ⅵ）－うつ症状からの回復」『吉備国際大学研究紀要（社会福祉学部）』19，11-22.
杉原俊二（2010）「自分史分析に関する一考察（Ⅶ）－４テーマ分析法によるライフストーリーの生成」『高知女子大学大学研究紀要（社会福祉学部）』59，47-66.
徳田治子（2004）ライフストーリー・インタビュー．無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ（編）『質的心理学－創造的に活用するコツ』148-154．ミネルヴァ書房.
渡辺康麿（1990）『セルフ・カウンセリング』ミネルヴァ書房.
渡辺康麿（2003）『自分を見つける心理分析－セルフ・カウンセリング入門』講談社.
White, M. & Epston, D. (1990) Narrative Means to Therapeutic Ends. W.W. Norton, New York.（＝1992，小森康永訳『物語としての家族』金剛出版.）
White, M. (1995) Re-Authoring Lives: Interviews & Essays. Dulwich Centre Publications, South Australia.（＝2000，小森康永・土岐篤史訳『人生の再著述－マイケル、ナラティブ・セラピーを語る』ヘルスワーク協会）
やまだようこ（2000）「人生を物語ることの意味-ライフストーリーの心理学」やまだようこ（編）『人生を物語る－生成のライフストーリー』1-38．ミネルヴァ書房.

２．研究の目的

本研究の目的は、自分史分析の４Ｔ法を用いて、うつ経験者の回復期支援をおこなう方法を開発することである。それによって「中年期の危機」を乗り越え、現在も増え続ける自殺者や自殺予備軍に対する有効で簡便な援助方法を開発し、検証をすることである。

３．研究の方法

(1)2010年度

①予備調査１：自分史分析（生活史分析）をおこなった健常者に対する追跡調査

a. 目的：杉原が、中年期の健常者に対して生活史分析をおこなった対象者への追跡調査をおこない、自分史分析が「中年期の危機」に効果的であったのかを検討する。

b. 方法：対象者は生活史分析を実施した人。調査方法は、まず半構造化インタビューを１回おこなう。そこで、生活史分析の実施前と実施後で変化があったか、実際にどのような効果があったのかについて質問する。また、同時に「自尊感情尺度」「自己受容測定尺度」「特性的自己効力感尺度」を用いて、実施前と実施後の評点をしてもらい、どの程度変化したと感じているかを調べる。インタビューの内容については内容を質的に検討し、実施前後の評点と合わせて、効果があったかどうかを具体的に示す。

c. 予想される結果：自分の人生の全体像を語り、それを確認する作業は、生活史分析の最終面接でおこない、一定の効果があったと語られている。しかし、その後の生活にどのような影響があったのかについては、確認ができていない。対象者の「語り」を詳細に検討し、それを分析することで、「中年期の危機」を乗り越えるヒントが見つかると考えられる。

②予備調査２：自分史分析(生活史分析)をおこなった「うつ経験者」に対する追跡調査

a. 目的：「うつ経験者」（うつ病あるいはうつ

症状と精神保健指定医に診断され、６か月以上の通院＜入院期間を含める＞をしている人）に対して調査を行なう。すでに「うつ経験者」に対して生活史分析をおこなった対象者への追跡調査をおこない、自分史分析が「うつ病の回復期」にどのように効果的であったのかを検討する。

b. 方法：予備調査１と同様に、まず、半構造化インタビューをそれぞれ１回おこなう。また、その時に予備調査１で用いた尺度に加えて、「抑うつ尺度」「抑うつ自己評定尺度」「絶望感尺度」を用いて、実施前と実施後の評点をしてもらい、どの程度変化したと感じているかを調べる。インタビューの内容については内容を質的に検討し、実施前後の評点と合わせて、効果があったかどうかを具体的に示す。

c. 予想される結果：予備調査１同様に、生活史分析の最終面接で、すでに述べたような一定の効果があったと語られている。しかし、「うつ病(あるいはうつ症状)」の回復期にどのような影響があったかについては、まとまって語られているわけではない。また、その後の生活にどのような影響があったのかについては、確認ができていない。対象者の「語り」を詳細に検討し分析することで、予備調査１と同様に「中年期の危機」を乗り越えるヒントが見つかると考えられる。

③本調査：「うつ経験者」の回復期における４Ｔ法の実施

a. 目的：回復期にある「うつ経験者」に４Ｔ法をおこない、その手順と効果を確認する。同時に、問題点やそれに対する改善方法がないかを調べる。

b. 方法：回復期にある「うつ経験者」に４Ｔ法を実施する。手順は以下のとおりである。

（a）初回面接（面接の手順と調査協力の承諾）。ここでは、自尊感情に関する尺度、うつに関する尺度を用いて、実施前の状態を測定した。

（b）第２回面接（テーマ設定）。まず、対象者の生活史の年表を調査者と一緒に作成して、どのテーマを選んで話をするかと決めた。

（c）第３回～第６回面接（４Ｔ法の実施）。面接ごとに、テーマに沿って自分史を語り、それを調査者が記録した。４つのテーマがあるので、４回繰り返される。それぞれの面接終了後、面接内容を調査者がまとめ、次回の面接前に対象者へあらかじめ送っておく。

（d）第７回面接（振り返り）。対象者が語った内容を調査者が文章化して、２人で読み合わせ、内容の検討をおこなった。ここで、４つのテーマを最終的に確認して決定した。

（e）第８回面接（終了面接）。これまでの面接と４Ｔ法での内容を振り返った。ここでは、対象者から不足分があれば補ってもらった。４Ｔ法実施の評価を、初回面接で用いた尺度で測定をした。また、研究の公表方法など（特に事例を提示する場合は念入りに）を説明して、研究への協力について３度目の承諾を得る。

(2) 2011 年度

①本調査：「うつ経験者」の回復期における４Ｔ法の実施

a. 目的：前年度の予備調査と本調査に引き続き、４Ｔ法による本調査を実施し、効果があるかを検討する。同時に、実施方法の問題点やそれに対する改善方法がないかを調べる。

b. 方法：対象者は回復期にある「うつ経験者」。年齢は、調査開始時に 40 歳以上（「中年期の危機」との関連を調べるため）。担当医やスタッフから説明を受けた上で承諾してくれた人を対象。

(3) 2013 年度

①「うつ経験者」の４Ｔ法の追跡調査

a. 目的：４Ｔ法の実施者のうち、追跡調査を実施する。援助の効果と同時に、問題点やそれに対する改善方法がないかを調べる。

b. 方法：対象者は回復期にある「うつ経験者」で４Ｔ法を終了した８名（男６名、女２名）。半構造化面接を１回実施する。

②第２回面接を改良した４Ｔ法の実施

a. 目的：前年度の中断・再開事例を検討し、ディグニティセラピー（小森康永・チョチノフＨ，Ｍ（2011）『ディグニティセラピーのすすめ』金剛出版）の手法を用いて第２回面接を改良し、その検証をおこなう。

b. 方法：第２回面接で４つのテーマに絞り、「発症前(病前性格)」「発症状況」「治療期」「リハビリ期」について、１時間程度で語ってもらう。対象者はこれまでの調査と同様に、回復期の「うつ経験者」である。

４．研究成果

(1) 2010 年度

①予備調査１：自分史分析（生活史分析）をおこなった健常者に対する追跡調査

中年期の健常者へ半構造化面接をおこない、自分史分析が効果的であったのかを検討した。対象者は、「生活史分析」を実施した 12 名（男 11 名、女１名）であった（年齢は、平均 46.8 歳。41～49 歳）。生活史分析の実施前と実施後については、12 名から肯定的に変化した（効果があった）という回答であった。具体的には、「転職に踏み切れた。満足でき

ている」「40 歳すぎに始まった、一時的なうつ状態を乗り切れた」「今までの苦労が必要なものであることがわかった」といった内容が示された。

②予備調査２：うつ経験者に対して生活史分析をおこなった事例の追跡調査

対象者へ半構造化面接をおこない、自分史分析が「うつ症状からの回復」に効果的であったのかを検討した。対象者は、生活史分析を実施した「うつ経験者」２名（男性。年齢は平均 46.2 歳、45～47 歳）。生活史分析の実施前と実施後については、２名とも肯定的に変化した（効果があった）という回答であった。１名は「劇的に変化した」としており、うつ尺度からも症状が回復していることがわかった。もう１名は「じわじわと効いてきた」としており、自分を肯定して生きることが可能になったとしている。

③本調査：うつ経験者の回復期における４Ｔ法の実施（の１部）

回復期にある「うつ経験者」に４Ｔ法をおこない、その手順と効果を確認する。同時に問題点を調べ、それに対する改善方法を検討した。対象者は、２名（男性。年齢は平均 43.2 歳、41～45 歳）。手順としては健常者と同じで問題はなかった。特に、第１回面接と第２回面接が同一日に実施可能であった。また、病気や自殺企図などの「うつをめぐる語り」で、「実際の症状より軽いように言ってしまう傾向」があることが見られた（特に１名に）。これは、語りと医師から処方された薬の量に大きな違いが見られたことから示唆された。

(2) 2011 年度

①本調査：うつ経験者の回復期における４Ｔ法の実施

2010 年度の本調査（２名）に引き続き、４Ｔ法による本調査を実施した。対象者は回復期にある「うつ経験者」８名（男６名、女２名）。年齢は、調査開始時に 40 歳以上（「中年期の危機」との関連を調べるため）。担当医やスタッフから説明を受けた上で承諾してくれた人を対象とした。

８名のうち男性４名が途中で中断した（第４回面接後）。２名は３か月以内に再開したが、２名は再開できなかった。

なお、これまでの検討から、４Ｔ法は、以下のような手順で実施した。

a. 初回面接（面接の手順と調査協力の承諾）。ここでは昨年度と同様に、自尊感情に関する尺度、うつに関する尺度を用いて、実施前の状態を測定した。
b. 第２回面接（テーマ設定）。まず、対象者の生活史の年表を調査者と一緒に作成して、どのテーマを選んで話をすると決めた。なお、健常者のテーマ設定には幅があるが、うつ経験者の場合は、「病前性格」「発症時」「発症後」「その後」に絞りやすいことがわかった。
c. 第３回～第６回面接（４Ｔ法の実施）。面接ごとに、テーマに沿って自分史を語り、それを調査者が記録した。４つのテーマがあるので、４回繰り返される。それぞれの面接終了後、面接内容を調査者がまとめ、次回の面接前に対象者へあらかじめ送っておく。この時、中断したケースが４例あり、うち２例は３か月以上間隔をあけて再開したが、２例は中断したままである（医師への受診は継続中）。
d. 第７回面接（振り返り）。対象者が語った内容を調査者が文章化して、２人で読み合わせ、内容の検討をおこなった。
e. 第８回面接（終了面接）。これまでの面接と４Ｔ法での内容を振り返った。ここでは、対象者から不足分があれば補ってもらった。４Ｔ法実施の評価を、初回面接で用いた尺度で測定をした。また、研究の公表方法など（特に事例を提示する場合は念入りに）を説明して、研究への協力について３度目の承諾を得ている。

(3) 2012 年度

①うつ経験者の回復期における４Ｔ法の追跡調査

前年度までの４Ｔ法による本調査 10 名（2010 年度２名、2011 年度８名）のうち、終了した８名について追跡調査を実施。半構造化インタビューを１回おこない、これまでの援助の中で浮かび上がっている問題点を整理した。

８名中７名は４Ｔ法の実施により「回復が進んだ」と感じていた。１名は「悪くはなっていない」「あまり変わらなかった」とあった。

なお、中断したままの事例については、発達障害（アスペルガー障害）との関連性も示唆されたが、実際のところは十分にわからないままである。

②第２回面接を改良した４Ｔ法の実施

対象者は４名（男性）。４Ｔ法は、以下のような手順でおこなった。

a. 初回面接（面接の手順と調査協力の承諾）。
b. 第２回面接（テーマ設定）。健常者の場合は、どのテーマを選んで話をするかと決めていた。うつ経験者の場合は、中断を防ぐために４つの質問をプレインタビューとして実施した。これで、十分と対象者が感じれば、ここで終了する。さらに自分史を語りたい人は、その次に進む。

c. 第３回～第６回面接（４Ｔ法の実施）
d. 第７回面接（振り返り）。対象者が語った内容を調査者が文章化して、２人で読み合わせ、内容の検討をおこなう。
e. 第８回面接（終了面接）。これまでの面接と４Ｔ法での内容を振り返る。４Ｔ法実施の評価を、初回面接で用いた尺度で測定をする。

これらの手順で実施したところ、４例とも４Ｔ法を実施し、中断なく終えることができた。また一定の改善が見られた。この手順に従ってマニュアルとして作成した。

③自分史分析のまとめ

なお、これらの検討を通して、「自分史分析とは、自分の歴史を自分で表現（自己表現）し、自分で分析し（自己分析）、自分で理解し（自己理解）、自分で正当に評価（自己評価）をして自分を受容（自己受容）していくセルフヘルプ（セルフケア）の視点を持った援助方法」であるとの考えを深めた。そして、「自分史分析はナラティヴアプローチの一技法として理解することができる」ということを再認識した。

つまり、自分史分析の効果として以下の点が挙げられた。

a. セルフケアの技法
b. 自分の人生を振り返ることができる。
c. 自分の人生について他人の意見が聞ける。
d. 自己評価が変化する（マイナス評価からプラス評価へと一変する人もいる）。
e. 生き方を変えるヒントになる。
f. カウンセリングの技法に応用できる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）


① 杉原俊二、自分史分析に関する一考察（Ｘ）－うつ経験者の４テーマ分析法によるライフストーリーの生成（２）、高知県立大学研究紀要（社会福祉学部編）、査読有、62 巻、2013、1－18
② 杉原俊二、４テーマ分析法を用いた『うつ経験者』の回復期支援法（Ⅰ）－健常者への予備調査の検討、人間科学研究、査読有、８号、2012、1－6
③ 杉原俊二、４テーマ分析法を用いた『うつ経験者』の回復期支援法（Ⅱ）－うつ経験者への予備調査の検討、人間科学研究、査読有、８号、2012、7－12
④ 杉原俊二、自分史分析に関する一考察（Ⅸ）－うつ経験者の４テーマ分析法での中断・再開事例の検討、高知県立大学研究紀要（社会福祉学部編）、査読有、61 巻、2012、25－40
⑤ 杉原俊二、自分史分析に関する一考察（Ⅷ）－うつ経験者の４テーマ分析法によるライフストーリーの生成、高知女子大学大学研究紀要（社会福祉学部編）、査読有、60 巻、2011、21－42


〔学会発表〕（計７件）


① 杉原俊二、４テーマ分析法を用いた『うつ経験者』の回復期支援法（４）－第２回面接の改良、日本家族研究・家族療法学会第 30 回大会、2013 年 6 月 22 日、タワーホール船堀
② 杉原俊二、４テーマ分析法を用いた『うつ経験者』の回復期支援法（５）－研究のまとめと今後の展望、第 37 回ＫＪ法学会、2012 年 6 月 8 日、川喜田研究所
③ 杉原俊二、４テーマ分析法を用いた『うつ経験者』の回復期支援法（３）－４Ｔ法の研究とＫＪ法とのかかわり、第 35 回ＫＪ法学会、2012 年 11 月 10 日、川喜田研究所
④ 杉原俊二、４テーマ分析法を用いた『うつ経験者』の回復期支援（２）－４Ｔ法中断・再開事例の検討、日本家族研究・家族療法学会第 29 回大会、2012 年 6 月 1 日、山口県保健総合会館
⑤ 杉原俊二、４テーマ分析法を用いた『うつ経験者』の回復期支援－予備調査の検討から、日本家族研究・家族療法学会第 28 回大会、2011 年 6 月 3 日、静岡県コンベンションアーツセンター
⑥ 杉原俊二、４テーマ分析法を用いた『うつ経験者』の回復期支援法（２）、第 33 回ＫＪ法学会、2010 年 11 月 21 日、東京工業大学
⑦ 杉原俊二、４テーマ分析法を用いた『うつ経験者』の回復期支援法－問題提起と状況把握、第 34 回ＫＪ法経験交流会、2010 年 6 月 12 日、川喜田研究所


６．研究組織

(1)研究代表者


杉原　俊二（SUGIHARA SYUNJI）
高知県立大学・社会福祉学部・教授
研究者番号：50259644